

薬師寺管主 加藤朝胤

「千のことば、一つのころ」薬師寺と土がつなぐ縁

令和7年(2025)10月1日 発行

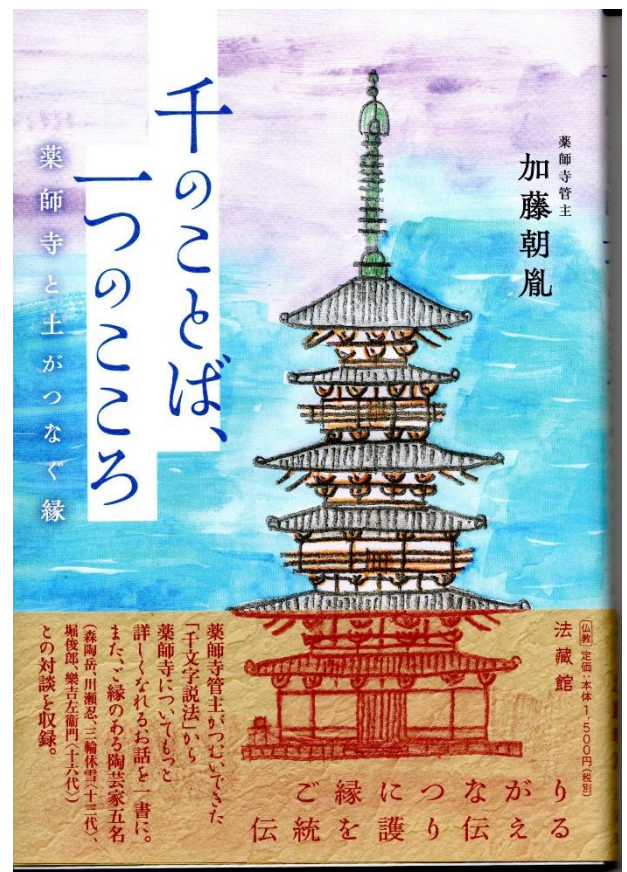
株式会社 法蔵館

薬師寺管主がつむいできた千文字法話から薬師寺についてもっと詳しくなれるお話を一書に。またご縁のある陶芸家五名との対談を収録しています。

加藤朝胤管主による新書『千のことば、一つのころ——薬師寺と土がつなぐ縁』（法蔵館、2025年）は、薬師寺の歴史と精神を現代に伝える珠玉の法話集であり、仏教と芸術、そして人との「ご縁」を深く見つめ直す一冊です。

本書は、薬師寺管主としての加藤氏が長年にわたり紡いできた千文字法話を軸に、薬師寺の使命、再建の歩み、文化財修復の裏側、そして仏教の教えが現代にどう息づいているかを語ります。金堂や東塔の再建・修理に関する記録は、単なる建築史ではなく、信仰と人々の協力が織りなす物語として描かれています。特に「命を未来に繋ぐこと」「悔過の本質」などの章では、仏教の根本的な教えが日常生活にどう活かされるかを丁寧に説いています。

また本書の特色は、陶芸家との対談「土がつなぐ」にもあります。森陶岳、川瀬忍、三輪休雪、堀俊郎、樂吉左衛門という五名の陶芸家との語らいを通じて、「土」という素材が持つ無常性、人間との関係性、創造の哲学が浮かび上がります。芸術と仏教が交差する場面では、「教えないことが教える」といった深い言葉が読者の心に響きます。



薬師寺金堂

明治末・大正初めの頃の絵葉書より

（写真提供：成瀬匡章氏 奈良県立図書館
今昔写真WEB蔵）

加藤朝胤管主は、薬師寺に23歳で入山し、高田好胤和上に師事。以来、法相宗務長や薬師寺執事長を歴任し、2019年に管主に就任。2025年10月長老に。